

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 2 月 22 日

所 属：生命・環境科学部 食品生命科学科

氏 名： 三宅司郎 職位：教授

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

私は企業勤めが長く、研究、製品開発、マーケティング、営業を含めた事業活動を一通り経験してきました。そこで、この経験を活かして教育活動に従事しています。また、担当する食の安全・安心の分野では、2年生で食品衛生の基礎、3年生で応用としての食中毒科学と毒性学、そして4年生で発展としてアクティブラーニングを含めたHACCP管理論（JFSMに承認されたHACCP研修）と3年をかけて体系化し、実施しています。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
地球共生論	全学	必	1年	564
食品衛生学	食品・環境・動応	必（食・ 環）、選 （動）	2年（食・ 環）、4年 （動）	食51,環76, 動47,合計 174
食中毒科学	食品	必	3年	67
毒性学	食品	選	3年	54
食品衛生学実習	食品	必	3年	58
HACCP管理論	食品・環境・動応	選	4年	食50,環16, 動1,合計 67
科学者研究者論	大学院	選	1年	21
食品健康科学特論	大学院	選	1年	5

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

学生が卒業後に所属する実社会では、どのようなポジションに着任しても、与えられた仕事に対してオーナーズマインドを持って考え、目標を設定して自ら活動し、成果を出すことが求められます。それも、組織の中で同僚や上司、部下とチームを組んで進める必要があります。一方、学生は記憶力を求められる受動的な授業に慣れており、これまでに受けてきた教育と実社会で求められているスキルの間にギャップが存在することを実感しています。そのため、社会で活動できる思考力と行動力の涵養を教育の理念に据えています。学生がこれらの能力を養うには、授業と社会の両方に「興味」を持つことがモチベーションになると考えており、学生の知らない実社会の話 scatter ばめることで学生の興味を育みつつ、卒業時には社会人としての準備（組織の一員でありつつ、自立して活動できる状態）ができていることを目指したいと考えています。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

新入学生は、記憶力を求められる授業に慣れているようです。一方で、自分で思考し

行動する能力は、残念ながら未発達と思われる。そこで、現状を踏まえつつ、卒業までに思考力と実行力、そして社会の一員になる自覚を身につけられるように教育を構成しています。具体的には、食の安全・安心に関する授業を担当していますが、1年生の全学授業「地球共生論」では、「地球規模での食品供給～持続可能性とその安全性～」と題して、食の安全に関する科学的視点とそこに関わる企業の視点から講義し、実社会に出た時には学生自身が食の安全の当事者であることに気づかせます。2年生は、食品衛生学の教科書に基づいた授業を行います。復習すれば確実に解答が可能な小テストを授業回ごとに実施し、最終日には振り返りテストを行って、知識を定着させます。授業では、社会人経験を盛り込むことで、教科書に書かれていることが実社会で役立つことを気づかせます。3年生は、食品衛生学の応用として、食中毒科学と毒性学を教えます。これらの授業では、有機化学や生化学の知識が食品衛生をより深く学ぶために必要であり、さらにそれらが実社会に必要なスキルに繋がっていることを気づかせます。4年生のHACCP管理論では、2日間缶詰のグループ討議によるアクティブラーニングを実施して、実社会で義務化されているHACCPを疑似体験します。この授業は、2年生から培ってきた食品衛生に関する思考力と行動力を発揮する場として設定していて、実社会で経験するHACCPを先取りしたものです。HACCP管理論は、食品安全マネジメント協会によって承認された正式な研修プログラムであり、就職活動や就職してからのポジションの獲得に有利に働くことから、学生の向学心を高めるモチベーションになっています。以上、基礎から実践までを一気通貫させて学生の思考力と行動力を涵養し、社会人へと巣立つ準備に導くことが、私の基本的な考えです。

アクティブラーニングについての取組

HACCP管理論は、グループ討議によるアクティブラーニングです。他に、食品衛生学実習もアクティブラーニングですが、さらに最終日には実験結果をスライドにまとめて発表させています。

ICTの教育への活用

授業の小テストには、AzaMoodleを使用しています。また、授業を録画し、必要に応じてAzaMoodleにアップしています。配慮学生への補講なども、Meetによるオンラインやオンデマンドで実施しています。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）

教育（授業，実習）の創意工夫については、Bです。食の安全・安心に関する授業は、微生物学、生物学、有機化学、生化学、物理学などの自然科学に加えて、年々変化するレギュラトリーサイエンスが関わる総合的な学問です。資料のアップデートを重ねながら、その全体像が理解できるように改善を試みています。

②学生の理解度の把握（A～C）

学生の理解度の把握は、Bです。授業の最初に、毎回小テストを実施することで理解度を把握するように努めています。

③学生の自学自習を促すための工夫 (A~C)

学生の自学自習を促すための工夫は、B です。小テストを授業の最初に実施することで、テスト勉強と前週の授業の復習を習慣づけるようにしています。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (A~C)

学生とのコミュニケーション(質問への対応等) は、B です。コロナ前と比較すると、授業後に質問に来る学生が減りました。一方で、gmailなどでの質問は増えています。

⑤双方向授業への工夫 (A~C)

双方向授業への工夫は、C です。残念ながら、対面形式とはいえ授業を録画する必要があり、配慮学生用にオンライン授業も兼ねると、私のスキル不足から満足な双方向授業とはいええない状況です。コロナ禍以前のように、質問と回答のやり取りや学生による短い発表を重ねる必要があると感じています。

※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)

5. 学生授業評価 (分量の目安: 4~7行 (160字~280字))

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

今回は、修正を求める声がほとんど上がっていませんでした。そこで、食品衛生学に関しては、これまでの方法を踏襲するとともに、独自資料を増やして理解しやすくなるように工夫をしました。

②①の結果はどうでしたか。

まだ評価結果が返ってきていないので、不明です。

③②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

次年度は、授業方針をガイダンスの時点でさらに詳細に伝えることと、毎回の授業で重要な点をより強調して、ポイントを勉強してもらえるように努めたいと思います。

6. 学生の学修成果

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

授業の最終回に、振り返りテストを実施することにしました。これをガイダンスで説明して、小テストとも関連付け、学修のモチベーションが継続するようにセットしたいと考えています。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

HACCP 管理論を履修した卒業生からは、毎年、比較的多くの「受講して良かった」という声が、SNS などを通じて返ってきています。また、大学入試の面接で、「HACCP 管理論があるから麻布大学を受験した」という声も多く聞かれるようになり、食品生命科学科の HACCP 教育は知名度が上がってきていると実感しています。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

FD 研究会については、基本的に全て参加することで学びの場に行っています。先約などがあり参加が無理な場合は、後日に動画を観ることでフォローしています。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

私は退職まで残り1年なので、短期的な目標になります。勉強に真面目に取り組む学生をいかに伸ばすか、勉強習慣がつかない学生をいかに引き上げるかに焦点を当てて教育を継続したいと思います。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス、學理